彩の国 埼玉県
Saitama Cancer Center News

がんセンターだより

第 26 号
平成22年10月15日 発行
発 行
埼玉県立がんセンター
発行責任者
病院長
田部井敏夫

基本理念 “唯惜命” 私達は生命の尊厳と倫理を重んじ、十分な医療情報提供と患者さんの自己決定権を尊重し博愛と奉仕の精神で医療を行います。

精神腫瘍科のご紹介

精神腫瘍科科長兼副部長
和田 信

4月から精神腫瘍科が新設されました。「精神腫瘍科」とは、耳慣れないかもしれませんが、腫瘍をわずらう患者さんの精神・心理面を専門的にみる診療科です。全国でもまだ数えるほどしかない、若い専門領域です。がんという病気になると、様々な心配が大きくなって、落ち着いていられなくなったり、気持が沈んで元気が出なくなってしまったりすることが、よくあります。また、気持が混乱してしまうことも、稀ではありません。こうした時にも、自分の力で乗り越えていかれたり、ご家族やご友人が支えになってくださったりすることが多いでしょうが、必要な場合には、私ども医療スタッフにもお手伝いさせていただければ、と思います。

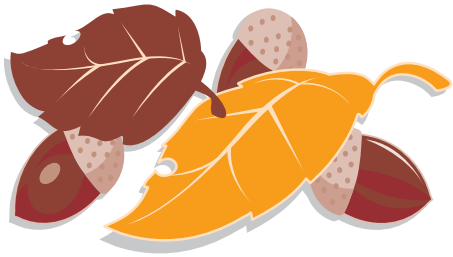
精神腫瘍科では、まずはじっくりお話をきかせていただくことから始め、どのようなことで苦しい思いをされているか、理解することが第一歩となります。そして、相談を続けたり、必要なら薬も用いたり、その他の方法を利用したりと、ひとりひとりの患者さんにあった方法を見つけてゆきます。身体の状態やお気持ち、生活の仕方など、色々な面を考え、相談しながら方針を検討します。

その時々の病気の状態、進められている治療の影響、病気になってから今までの経緯、今後の見通し、生活やお仕事の事情、ご家族など、様々な側面が、精神・心理面にも大きく影響するものですから、患者さんをとりまく多くの面から理解して、診療に臨むようにしています。

また、患者さんご本人だけでなく、ご家族のご相談にも積極的にのっています。

現在精神腫瘍科は、常勤医師１名・非常勤医師１名で、がんセンター各診療科の入院患者さんと外来患者さんの診療を行っています。毎日のように各病棟を回って、患者さんやご家族と話したり、主治医・看護師等のスタッフと相談したりしています。外来は、水曜午後と木曜日に開いています。おかげさまで多くのご依頼をいただき、忙しく駆け回っております。

がんセンターでの仕事は、まだ立ち上げて数ヶ月で、これから更に診療体制を充実させるべく工夫してゆきたいと考えております。皆様の率直なご意見をお聞かせください。患者さんも、ご家族も、どうぞお気軽にご相談ください。



目次

精神腫瘍科のご紹介……1
骨軟部腫瘍って何？／外来での化学療法を安全に行うために……2
臨床工学室の紹介……3
乳癌の個別化治療を目指して／第35回 がんの集い……4

埼玉県のマスコット
コバトン

骨軟部腫瘍って何？

整形外科科長兼部長
眞鍋　淳

４月１日付けで整形外科部長に就任しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。私は1978年３月に 東京医科歯科大学医学部を卒業後、整形外科に入局し一般整形外科研修後、骨軟部腫瘍を専門として診療してきました。骨軟部腫瘍というのは骨や軟部組織に発生する腫瘍です。軟部組織というのは脂肪、筋肉、腱、神経、血管などを指します。骨軟部悪性腫瘍は別名で肉腫ともいいます。ご存じのように癌と肉腫を併せてがん（ガン）と呼びます。根治的手術は切断しかなかったそれまでと異なり根治的患肢温存手術が開発されてきた時期でもあり骨軟部腫瘍を選択しました。四肢のみならず骨盤や体幹、脊椎など広範囲の部位を扱うことも興味深く1983年から本年３月まで癌研究会附属病院整形外科で約28年間骨軟部腫瘍の診療と臨床研究に専念してきました。1992年から骨軟部腫瘍の根治的手術法の基礎データーになる切除縁登録の解析を行ってきました。その結果骨軟部腫瘍の切除法のガイドラインが明らかになってきました。また1994年にパスツール処理自家骨移植に関する実験的研究で同法の科学的根拠を実証しそれに基づいて臨床応用を行ってきました。同法は世界で約200例実施され安全性と有用性が確認されています。当院でもすでに実施してきましたが患肢の機能向上を目指して今後も継続していきます。また近年は手術、化学療法の著しい進歩によって骨軟部悪性腫瘍の予後は飛躍的に向上しました。骨肉腫を例にとると1970年代は切断しても５年生存率は30%以下であったものが最近10年では80%以上が根治的患肢温存手術可能で５年生存率も初診時に転移がない場合80%に向上しました。化学療法はある決まったプロトコールを無条件に行うのではなく各薬剤ごとに効果判定を行って無効な薬剤は使わないテーラーメイドの化学療法を実施し最小の副作用で最大の効果をあげることを目指しています。

医療にはHeart、Art、Scienceが重要です。またProfessionalismとして結果責任を常に肝に銘じておくべきと思います。お一人一人の患者さんに対して優しさと情熱を持って最善の治療を行うべく努力する所存です。埼玉県は718万人の人口を抱えており多くの患者さんがおられます。これまでの実績をさらにのばして埼玉県のみならず全国に発信できる科にしたいと考えております。ご指導ご鞭撻よろしくお願い申し上げます。

外来での化学療法を安全に行うために

デイケアセンター副師長
がん化学療法看護認定看護師
前原　みゆき

現在デイケアセンターでは、１日平均67名の患者さん達が日帰りで化学療法を受けています。化学療法では、副作用症状を上手にコントロールできることが重要なカギとなります。患者さんの多くは、白血球が減少し易感染状態になったり、吐気や食欲低下、口内炎で食事が思うようにとれなかったり、手足のしびれや皮膚が炎症をおこすことで細かな作業がしづらくなったりと、抗がん剤の副作用を克服しながら治療を続けています。外来で社会生活を送りながら化学療法を継続するためには、患者さんがご自分で副作用の観察や予防ケア、症状への対処を行なわなくてはなりません。私たち看護師は、患者さんが副作用に対しセルフケアができるよう、副作用出現時期や症状などを説明し、患者さんに合った対処方法をともに考え支援しています。日帰り治療のため患者さんとふれあえる時間は短

いのですが、患者さんのベッドサイドに看護師ができるだけ足を運び、ひとりひとりの患者さんの声に耳を傾けています。

化学療法を受け続けることは身体的にも精神的にも大変なことです。頑張りすぎず、つらい時にはどうぞ看護師に声をおかけください。医師や外来看護師、相談支援センター看護師、MSWと連携しサポートしていきます。

最後に、外来化学療法では、患者さんひとりひとりへのきめ細やかな支援と安らぎのある治療環境が必要と考えています。患者さんがより安全に安心して治療を受けるために、担当看護師制の導入や待ち時間対策、化学療法相談窓口の設置など検討していきたいと思っています。今後、新病院開設に向けて「日本一やさしい病院」を目指し、体制を整えていきたいと思います。

デイケアセンター入口

臨床工学室の紹介

近年、医療現場では生命維持管理装置をはじめ、様々な機器が使用されるようになり、専門技術者の必要性から1988年に臨床工学技士が国家資格として誕生しました。現在、当センターには、臨床工学技士２名が在籍。今年度から１名の定員枠が増え、精神医療センターとの兼務となっており多忙な状況です。

医療機器が安全に効率良く使用されることを目的に、医療機器管理や機器の操作・立会い等を行っています。

臨床工学技士
松本　貴之

●医療機器管理

各病棟・集中治療室・手術室内で使用される医療機器の購入・廃棄、運用状況の把握、感染対策、保守・点検、修理、トラブル対応、機器情報の一元管理。また、医療機器安全管理責任者の管理のもと、他部門と業務分担・協力し、医療機器に関わる安全管理業務を実施しています。

●機器の操作・立会い等

血行動態モニタリングカテーテルの挿入時サポート、末梢血幹細胞採取および骨髄濃縮、腹水濾過濃縮再静注法、血液浄化療法（持続緩除式血液濾過透析、吸着療法、血漿交換）、レーザー治療のサポートを行っております。

以上のような活動内容ですが、私たちは医療機器の専門職としての社会的使命を果たし、患者様により良い医療を提供できるようスタッフ一丸となって取り組んでまいります。

腹水濾過濃縮業務

医療機器管理を行っている臨床工学室

(詳細についてはhttp://www.saitama-cc.jp/department/me.htmlをご覧ください)

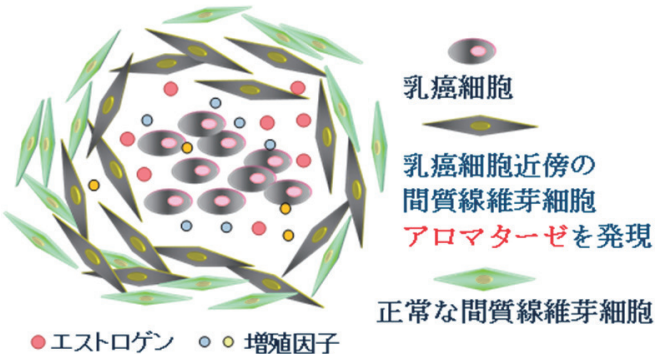
乳癌の個別化治療を目指して

― 乳癌特異的微小環境が制御するエストロゲンシグナルの解明 ―

臨床腫瘍研究所　山口　ゆり

乳癌は女性が罹るがんの第一位を占め、現在も増加する傾向にありますが、乳癌には女性ホルモンであるエストロゲン依存性のものが多いという特徴があり、ホルモン療法が広く行われています。エストロゲンは乳癌細胞にあるエストロゲン受容体に結合し、遺伝子の発現を介して癌細胞の増殖を促進しますが、ホルモン療法はこの経路をエストロゲンあるいはエストロゲン受容体を標的として遮断します。エストロゲンは閉経前では卵巣で作られますが、閉経後に発症する乳癌の場合は、癌細胞近傍の間質線維芽細胞がエストロゲン合成酵素であるアロマターゼを発現し、癌細胞を取り囲む微小環境にエストロゲンを供給します(図１)。ホルモン療法においてアロマターゼ阻害剤は高い奏効性を示していますが、一部の乳癌ではエストロゲン受容体があってもホルモン療法が奏効しない場合もあります。また、乳癌微小環境中の様々な増殖因子もエストロゲン受容体を活性化します。そこで、私たちは、治療の個別化を目指して、個々の乳癌の間質線維芽細胞がエストロゲン受容体を活性化する能力を可視化して解析するシステムを開発しました。可視化にはノーベル賞でも有名なオワンクラゲ由来の緑色の蛍光たんぱく質GFPを用いました。また、各症例の乳癌細胞のエストロゲン受容体の機能を可視化するシステムも開発しました。これらの系を用いて針生検や手術サンプルを解析し、乳癌発症、進展のメカニズムの解明および個々の乳癌に的確な治療を選択するための指標の解明を目指しています。

図1．乳癌の微小環境



第35回 埼玉県民のための がんの集い

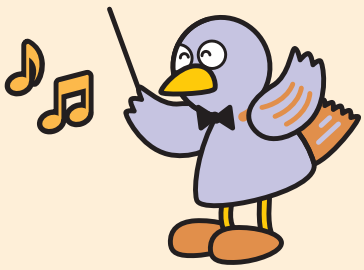
テーマ

「がん患者・家族・そして社会とのきずな」

～がんとともに社会でよりよく生きるための支援を考える～

開催日時　平成22年12月5日（日）13時～16時

開催場所　大宮ソニックシティ小ホール
（入場無料・事前申込み不要、定員４９６名）

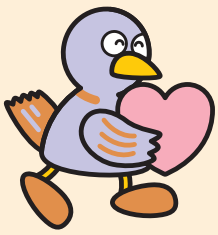


後　　援　埼玉県医師会　埼玉県健康づくり事業団
埼玉まなびぃプロジェクト協賛事業

概　　要

●パネルディスカッション

パネリスト　がん治療体験者とその家族
テ　ー　マ　「がん患者・家族・そして社会とのきずなについて」



●ふれあいコンサート

演　奏　者　石井　修氏　石井　英子氏　石井　紀子氏

●講演

演　　者　高杢　禎彦　氏
テ　ー　マ　「がんが教えてくれた大切なもの」